

関連性理論による外来語の分析

松崎 由貴

1. はじめに

国際化が著しい昨今、我々の身近では海外から多くのことばが入ってきている。これらのことばは、外来語あるいは最近ではカタカナ語と呼ばれ、我々の身近に氾濫している。そのため、国立国語研究所では外来語の言い換え提案を行っている。殊に英語からの外来語は非常に多い。本稿では、その外来語の意味に関して元になっている英語と外来語を比較することにより、外来語がどのように借用され、変化していったのかを関連性理論の立場から分析していきたい。また、外来語の今までの研究により多くの特徴が挙げられているのだが、その特徴に関しても関連性理論の見地から検討を試みたい。

2. 関連性の原理とアドホック概念

ここではまず、関連性の原理と解釈過程について簡単に説明したい。その後発話の解釈過程のうちのアドホック概念の構築 (Ad hoc concept construction) について詳しく述べていきたい。

関連性の原理とは、Sperber and Wilson (1986/1995) によって提案された発話解釈の原理のことである。そもそも「関連性 (relevance)」とは、発話を含むある顕示的刺激がある個人にとって個人の認知環境に影響を及ぼす認知効果を得た際に、その刺激は「関連性がある (relevant)」となる。この概念を基盤に作られた関連性の原理は次の2つから成り立っている。

Cognitive principle of relevance

Human cognition tends to be geared to the maximization of relevance

(Sperber and Wilson, 1995: 260)

Communicative principle of relevance

Every utterance creates a presumption of its own optimal relevance
(Sperber and Wilson, 1995: 260)

認知的関連性の原理は、平たく言えば、人間は知りたがり屋であり知らせたがり屋であるということを表している。一方の伝達の関連性の原理は発話には関連性があるのが当たり前であると聞き手も思っているであろうし、話し手もそのことを知っているがため、発話に注意を払っているということである（今井2001）。2つの原理のうち認知的関連性の原理を前提に、伝達の関連性の原理が成り立っている。関連性の原理を基に実際は次のような解釈過程を聞き手は経ると考えられている。

Relevance-theoretic comprehension procedure

- (a) Follow a path of least effort in computing cognitive effects: Test interpretive hypotheses (disambiguations, reference resolution, implicatures, etc.) in order of accessibility¹.
- (b) Stop when your expectations of relevance are satisfied (Wilson, 2002: 259).

関連性理論では先の解釈過程にしたがって、コードの復号化と推論をして、2つのレベルの想定を聞き手が得るとされている。2つのレベルの想定とは、明意と暗意である。明意を得る際には、一義化、飽和、自由拡充、アドホック概念の構築の4つの処理が聞き手によって行われる。暗意の構築はこの明意の復元と相互作用しながら純粋に推論のみによって派生される。

では、明意を得る際に必要なアドホック概念の構築について詳しく見ていき

¹ 呼び出し可能性とは、ある想定が記憶から取り出されるあるいは、現在処理している顕示的刺激を手がかりにある想定が構築されるその度合いのことである。詳しく Carston (2002) を参照のこと。

たい。関連性理論では、Carston (2002) 以降発話レベルでの解釈のみならず、語レベルでの解釈にも、先に説明した関連性の原理が働いており、聞き手は、関連性による解釈の手順に従うといわれている。語レベルでの解釈に大きく関わっているアドホック概念の構築は、この解釈の手順に沿って関連性の追求をきっかけに符号化された概念を調整し、コンテキストごとにその場限りでもアクセスしやすい概念を構築することで、関連性の期待を満たし、その調整をやめるといことを行う。このアドホック概念の構築には、大きく2つの方法があり、さらにそれとは少し異なる別の概念の構築の方法があると考えられており、全部で3つの概念の構築方法がある (Wilson 2006)。外来語の概念には、この3つの方法が関係していると思われるため、これらすべてを簡単に説明していく。

まず、最初に主な概念の構築の方法の1つとして考えられている語彙的縮小について見ていきたい。語彙的縮小とは符号化された概念よりも伝達された概念の方が特定の、狭められた場合のことをいう。具体的に語彙的縮小とはどのようなことなのか、次の例を考えてみよう。

- (1) 花子は昨日から熱がある。
- (2) このぐらいの土地ならお金があつたら簡単に買えるね。

(1)、(2)は共にある話し手により発話され、その発話を聞いている聞き手に解釈されると仮定してほしい。(1)では、「熱」に注目をしてもらいたいのだが、人間であれば誰しもある程度の熱があることは、つまり平熱があることは、当然のことである。しかしながら、ここでの熱とはその平熱ではなくて、平熱よりも高い熱のことを話し手は意図して言っている。そのため、聞き手は[熱]という符号化された概念には入っているのだが、この概念をさらに狭めた伝達された概念である[熱*]²という別の概念で「平熱よりも高い熱」を関連性理論に

2 アドホック概念の構築では、符号化された概念とは関係しているが、別の一時的な概念を構築していると考えられるため、アスタリスクをつけることにより区別をしている。コンテキストにより、符号化された概念[熱]の別の概念を伝える場合であれば、また、違う[熱**]や[熱***]など、その時々コンテキストにより違う概念を表すためにアスタリスクをつけて区別している。

よる解釈の手順に従って引き出すことになる。また、(2)では「お金」に注目すると、誰もなにかがしかのお金は持っているものではあるが、ここでの「お金」は「土地が買えるくらいのお金」のことを話し手は意図して伝達している。やはり符号化された概念[お金]が狭められて「土地が買えるくらいのお金」という伝達された概念[お金*]をここでは聞き手が解釈の手順により構築することになる。

次に、概念の主な構築方法の2つめとして語彙的拡張について説明していきたい。語彙的拡張とは、符号化された概念よりも伝達された概念が拡張され緩められた場合のことをいう。語彙的拡張では符号化された概念のカテゴリに収まらないような物体・出来事・行為などが収まるようになるまで伝達された概念を緩める。この語彙的拡張は近似表現、カテゴリ拡張、誇張法、隠喩などでよく見られる。次の例で具体的にみてみよう。

- (3) 私が住んでいる部屋の家賃は、月に10万円だ。(実際は約10万円)
- (4) 花子の部屋は天国だね。

(3)の例文では(3)の聞き手が参考程度に家賃を教えてくれるかと話し手に尋ねた後の答えだと考えてほしい。この場合、厳密には話し手の家賃は10万500円なのだが、参考程度に聞いている聞き手に厳密に家賃をいう必要はないだろう。そのため、[10万円]という符号化された概念を緩めた伝達した概念[10万円*]を構築する必要がある。また、(4)は非常に暑い夏の日に冷房のない場所にいた話し手が花子の部屋に入ってきた時に発話したと想定してほしい。(4)の「天国」に着目すると、実際に花子の部屋は、天国にあるわけではない。「天国」とは亡くなった人が死後に行く場所であり、幸せに生活できると考えられている場所である。しかしながら、花子は亡くなくてもおらず、(4)の話し手も亡くっていない。そのため、ここでの「天国」とは符号化された概念ではなく、それを緩めた形で「ひどい暑さから逃れられる快適な生活をおくれる場所」という[天国*]の概念を聞き手は一時的に構築することになる。

3つめの概念の構築方法として概念の転嫁的用法が挙げられる。この用法

は、話し手自身の見解ではなく、話し手が他者にあると考える見解を表示する用法である。その見解には話し手の態度を示す場合もある。この用法は、アイロニー、メタ言語的否定、概念の獲得などで用いられている。次の例をみてみよう。

- (5) A : この犬は本当におとなしくていい子なのよ。(Aの前で、犬がBに飛びかかり噛もうとする。)
B : おとなしくていい子が私に飛びかかってきたけど。
- (6) A : 彼女は本当に優しいよね。
B : 優しいなんてものじゃないよ。女神だね。

(5)のBの「おとなしくていい子」の部分に着目すると、犬はBに飛びかかり噛もうとしたのだから、Bの見解ではおとなしくていい子とはならないはずである。つまり、「おとなしくていい子」とはAの見解を表したもので、それを転嫁的に利用し、さらにはそのAの記述に対しBは乖離した態度を表している。Bの発話を聞いたAはこのAの意図した転嫁的概念であることを関連性理論による解釈の手順により読み取り、この発話がアイロニーであることがわかる。(6)のBでも、「優しい」というのは、Aの見解でそれを転嫁的概念で表して、否定したということになる。そして、「女神」というメタファーで自分の見解を表している。この「女神」ということばには、「類まれない優しさを兼ね備えている」という情報が百科事典的情報にあり、<女神*>は<優しい>を論理的に含意している。そのため、「優しい」という表現はAの発話の内容が偽であるからというわけではなく、彼女に関して記述するのに「優しい」という表現では適していないとBが感じていることから、Aの表現「優しい」を転嫁的に表し、さらにそこに乖離的な態度を示しているということになる。この一連の話し手が意図した内容を聞き手は関連性理論による解釈の手順により得ることになる。

ここまででは、関連性の原理に関して簡単に説明し、アドホック概念の3つの用法を説明してきた。それでは、次にアドホック概念と外来語の関係を考えて

いきたい。

3. アドホック概念と外来語

先に説明したように関連性理論のアドホック概念の構築には、大きく3つの方法がある。縮小、拡大、転嫁的用法である。その中でも、当初英語から日本語へ、あるいは英語を元に外来語³を形成する際には、転嫁的用法が深く関わっていると Wilson (2006) により指摘されている。Wilsonによれば、借用語の概念の構築はこどもの概念獲得と同じような働きをするのだという。例えば、大学に行ったことも大学というその名前を聞いたこともない小学生のこどもが、母親から次のように言われたとする。

- (7) 母：ちゃんと勉強をしないと大学に入れないわよ。大学に行って、たくさん勉強をして、お父さんみたいな先生になるのでしょうか？

この発話を聞いたこどもは、今まで聞いたことのない「大学」ということばを関連性理論による解釈の手順によって、[大学*]というアドホック概念を構築する。この概念は、一般的な記述的概念とは異なる。記述的概念では、語彙的情報、論理的情報、百科事典的情報から形成されているが、この概念は語彙的情報の他に仮の論理的情報である[大学→一種の勉強をする場所]が入れられる。また、百科事典的情報には、母親の発話から得られる限られた情報のみが入れられる。例えば、「勉強をしないと入れないところ」や「たくさん勉強をする場所」や「父がかつて行ったことのある場所」や「先生になるには行かなければならない場所」などの情報が入れられる。こうすることでこどもは一時的に概念を構築し母親の発話を理解しようとし、さらには転嫁的概念の用法により自分もそのことばを使用することができる。例えば、「お父さんの大学はどこにあるの？」ということや、「お母さんは、大学には行ったことがあるの？」などが言えるようになる。この不完全な概念がやがて完全な概念へと作られて

3 ここでいう外来語には、英語での使用とは、異っていても英語が元になっていることには変わりがないため、いわゆる和製英語も含むものとする。

いくことになる。借用語もこの過程と同じように、初めて英語から日本語に借用された時には概念の転嫁的用法が行われて、語彙的情報と仮の論理的情報、さらには限られた百科事典的情報が入られる。そして、アドホック概念として仮の概念を作り、やがて完全な記述的概念へと変化していくことになる。しかしながら、その変化の過程で人から人へのコミュニケーションの際に、やはりアドホック概念が構築されていき、概念は変化していくと考えられる。英語から借用した、あるいは英語を元に作られた外来語がどのように変化して形成されているか、元となった英語と外来語を比較して、外来語の概念の形成をアドホック概念の構築の仕方では区別して分析してみたい。

まず、概念の転嫁的用法のみで元の英語の概念と日本語の概念がなんら変わらないものを紹介する。ジャム、コラボレーション、テレビ、アイスクリームなどがこれにあたりと考えられる。コラボレーションやアイスクリームは日本語ではコラボやアイスなどと短縮された言い方で用いられる場合もあるが、基本的に英語と同じ意味を指している。例えば、*Merriam Webster*⁴によると、英語の jam は “a food made by boiling fruit and sugar to a thick consistency” となっているが、日本語の『広辞苑』によると「果物に砂糖を加えて煮詰めた保存食品」とほぼ同じ意味になっている。

次に、概念の転嫁的用法から語彙的縮小化されたと考えられる外来語についてみていきたい。例えば、ドナー、ガールフレンド、クイズ、ナイーブなどがこれにあたりと考えられる。

ドナーとは、*Merriam Webster* によると英語では、次のように示されている。

- 1 : one that gives, donates, or presents something
- 2 : one used as a source of biological material (as blood or an organ)
- 3 a : a compound capable of giving up a part (as an atom, chemical group, or subatomic particle) for combination with an acceptor
- b : an impurity added to a semiconductor to increase the number of mobile electrons

4 標準的な語彙感覚を知るために、ここでは *Merriam Webster* を使用することとする。

一方、日本語でのドナーとは『広辞苑』によると「輸血の給血者、移植の臓器または組織の提供者」となっている。つまり、元は英語であった donor という語が転嫁的用法により概念が日本語に借用され、日本語では、英語の意味の2番目にあたる血液や臓器のような生物学的な物の提供源の意味をもち、元の概念が狭められた形となっている。また、ガールフレンドについて調べてみると、英語では *Merriam Webster* には次のように記されている。

1 : a female friend

2 : a frequent or regular female companion in a romantic or sexual relationship

Merriam Webster で最初の意味には、“She spends hours talking on the phone with her *girlfriends*.” の例文が挙げられている。そのため、1の意味には女性にとっての友達の意も含まれることがわかる。一方、日本語の『広辞苑』によると「男性にとっての女友達」となっており、日本語ではどちらかという単なる女友達ではなく、恋人という意味合いが強い(石綿 2001:51)。そのため、*Merriam Webster* の1番目の意味の男性から見た異性の友達ということと、2番目の意味で日本語では使われている。つまり、単なる「女友達」ということではなく、概念が狭められて「男性にとっての女友達」になる。さらにそれが狭められて「恋愛関係にある女友達」という概念が日本語にはあることになる。このように、単なる転嫁的用法だけではなく、概念が狭められ縮小されて英語から日本語へ借用されている外来語がある。

また、概念の転嫁的用法から語彙の拡大の用法を使用している外来語もある。例えば、ジュース、セロテープがこのような過程を経ているであろうということが分かる。ジュースについて英語の意味を *Merriam Webster* で調べてみると、“the extractable fluid contents of cells or tissues”の意味が第一義として載っており、つまり100パーセントの野菜や果物を絞ったジュースのことを指していると言える。一方、日本語でのジュースとは『広辞苑』では「汁、液汁。特に果物、野菜の絞り汁。果汁。また、広義にはそれを加工した飲料。」となって

おり、一般的には広義の意味で使われることが多い(石綿 2001:52)。そのため、英語の 100 パーセントの野菜や果物を絞ったジュースの意味が広められて日本語では使用されて、ソーダ類や果物や野菜の絞り汁が少しでも使われた飲料水まで指し示すことになる。また、セロテープは、英語ではイギリスのセロテープのブランド名であり(小林 1999:160-1)、この語が出来上がったのにはカテゴリ拡張が行われたことになる。Wilson (2006) によると、カテゴリ拡張とは、そのカテゴリの中で目立つ中心的な成員を使って、それが属する最も大きなカテゴリを表すということである。英語でのこの現象が起きて作られたことばとして、hoover や kleenex がこれに当たる。セロテープの例では、セロテープという特定のブランドはそれが属するセロテープという製品にまで概念を緩めたことになる。

どの外来語もその語が最初に英語から日本語に導入された時には、概念の転嫁の用法が使われ、さらには、それに概念の縮小や拡張が行われ、その場限りの解釈が行われた。その後、定着した概念へと発展していったと考えられる。

4. 外来語の特性とアドホック概念

外来語は今までの研究により様々な特徴が挙げられている。例えば、外来語には「新しさや絶妙なニュアンスを表現できる」(小林 1999:32)と言われている。また、既存の同じ意味の語と比べると分かりにくいという性質もある(田中 2007)。さらには、外来語を使うことにより既存の語よりも婉曲的な表現になる場合があるという特徴もある(田中 2007, 大石 2001)。このうちの後半の2つの特徴に関して、関連性理論により分析してみたい。

まず、田中(2007)では、「外来語に関する意識調査」(平成15年調査)、同Ⅱ(平成16年調査)によって「キャンセル/解約/取り消し」に関して分かりやすさを聞くと、「取り消し」を選ぶ人が最も多く、小差で「キャンセル」が続くという結果を得た。また、田中(2007)は「サポート/支援/手助け」に関して、具体的な場面を示して使う単語を選んでもらう方式の調査を行った。この調査の結果では、相手により使い分けをしており、「初めて会うお年寄りと話すと き」は「手助け」が圧倒的に多く、外来語の「サポート」は特別な配慮の必要な場

面では選ばれない。年齢別でもその意識には差がないという結果を得た。つまり、既存の語よりも外来語の方が分かりにくいと判断されていることになる。ただ、「友達と話をするとき」は、「サポート」が使われることが多いという結果も得ている。これは、比較的若い年代である20歳代、30歳代で特にこの傾向が見られ、約半数が「友達と話をするとき」に「サポート」を使用すると答えている。ただ、それは全く配慮がいらぬ場合のときであると田中は述べている。

この外来語の特徴である分かりにくさとは、宮田(2007)によると、「外来語は「有契性(motivation)」(ウルマン1989)を欠く、つまり意味が不透明なものであるが、これがカタカナ語の「分かりにくさ」の元凶である」としている。確かに尾形(1969)によると、日本語の大和語にはウルマンのいう有契性、つまり透明性がないのだが、漢字には透明性があり、英語と日本語の比較でも日本語の漢字の御陰で、形態素的に有契性があるということである。カタカナは、漢字と比べると透明性がないといえるであろう。しかしながら、これだけの理由で外来語が分かりにくいのかというと、そうではないと言えるであろう。

関連性理論による見解では、もともと外来語は、概念の転嫁的用法からきているため、その概念は、先に述べた通り不安定で、人から人へのコミュニケーションで変化していく可能性がある。そのため全体を把握しづらく分かりにくいと人は感じる可能性があると思われる。また、多くの人が使用する場面を選んで外来語を使用しているのには、話し手である側に伝達の関連性の原理が働いていることがわかる。つまり、「初めてあうお年寄り」に対して、「手助け」よりも外来語である「サポート」が使われないのには、多くの年代の人がお年寄りにとって「手助け」は完全な記述的概念であると考える一方「サポート」が転嫁的概念であるということを想定している。もしお年寄りが初めて「サポート」ということばを聞くのであれば、こどもが語を獲得するのと同じ状況が起こり、転嫁的概念の中には百科事典的情報が少ししか入っていない可能性が高い。そのため、「最適の関連性の当然視」の「話し手の能力と選択が許す範囲内において最も高い関連性を持つ」という「最も高い関連性」を聞き手であるお年寄りが得られない可能性が高いと話し手は考えるのであろう。その一方

で、自分と同じような感覚の友達であれば、「サポート」は転嫁的概念であることは少なく、ある程度安定した概念であると判断し、伝達の関連性の原理に見合ったものになるため、20歳代や30歳代の約半数の人が「サポート」を使用すると考えられる。

外来語のもう1つの特徴である既存の語に比べて、婉曲表現であるということについて検討してみよう。大石(2001)では、大学生188人に対してリストラ、キラー、スロー、ペナルティ、ローンの5つのことばに対しこれらの外来語がほぼ同じ意味の日本語に比べて穏やかな表現に聞こえるのかアンケート調査を行った。その結果、リストラ、スロー、ペナルティ、ローンに関しては、50%以上の学生が穏やかな表現に聞こえると答えた。一方、キラーに関してのみ、約40パーセントの学生が「穏やかではない」と答えたが、一方で「どちらとも言えない」を選択した学生が、同じような約40パーセントの値を示しているため、キラーということば自体があまり浸透していないからか、あるいは同じくらいのニュアンスであることがその結果によりわかったという。

では、なぜ一部の語に関して外来語が婉曲表現であると感じるのだろうか。それは、先に出てきたウルマンによる有契性にも関連しているだろう。つまり、透明性がないために、分かりにくく相手に強い印象を与えにくいということである。さらに、関連性理論の立場から検証すると、既存の日本語と外来語との概念の違いによるものだともいえる。既存の日本語が完全な記述的概念であり、その百科事典的情報にはたくさんの情報が入っていると考えられる。そのため、その語を使うことにより多くのマイナスと考えられる情報が伝わるという可能性もある。一方、外来語は転嫁的概念から来ているため、百科事典的情報には記載されていることが少なく、あまり多くの情報が示されることが少ないということがあるだろう。さらには、先の特徴にあったように転嫁的概念であることから「分かりにくい」という特徴があり、その分かりにくさが婉曲表現を生み出すことになると思われる。

大石(2001)によると、外来語は無感情であるという。つまり、日本語よりも外来語の方が感情を入れにくいのだということになる。そのため、中立的な表現であるという。この点に関して、関連性理論の立場からすれば、そもそ

も外来語は転嫁的概念であるため、他者の見解を述べていることになる。さらに、日本語では外来語はカタカナで示されるため、それは一目瞭然となる。もともとの性質が他者の概念であるため、本来の既存の概念に比べて、一步引いた形となることから、感情も入れにくいし、中立的な表現だともいうことができるのだろう。その中立的な表現というのが一部の外来語が婉曲表現であるということにつながると考えられる。

5. おわりに

本稿では、英語から日本語の借用語の意味とその特徴を関連性理論のアドホック概念の構築に基づき分析してきた。取り上げた外来語は一部であるが、それでも外来語が日本語へと入ってきて、どのように変化していったのかを概念の転嫁的用法により裏付けることができた。また、外来語の特徴も概念の転嫁的用法からくる性質によるものもあるということが解明されたであろう。今後の研究として、外来語の婉曲表現をポライトネスの観点からさらなる研究を試みたい。

* 本研究は、2012年度学習院大学外国語教育研究センター研究プロジェクト「関連性理論の研究」の成果の一部である。

参考文献

- Allott, N. (2010) *Key Terms in Pragmatics*. London: Continuum International Publishing Group.
- Carston, R. (2002) *Thoughts and Utterance: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell.
- 東森 勲 (1998) 「借用語と関連性理論」『神戸女学院大学論集』45(1), 1-28
- 井門 亮 (2012) 「イディオム解釈とアドホック概念」『言語・文化・社会』10, 1-15.
- 今井 邦彦 (2001) 『語用論への招待』大修館.
- 今井 邦彦 (編) 井門亮・岡田聡宏・松崎由貴・古牧久典・新井恭子 (訳)

- (2009) 『最新語用論入門 12 章』 東京：大修館書店。
- 石綿 敏雄 (2001) 『外来語の総合的研究』 東京：東京堂出版。
- Jary, M. (1998) “Relevance theory and the communication of politeness,”
Journal of Pragmatics 30, 1-19.
- 小林 千草 (2009) 『現代外来語の世界』 東京：朝倉書店。
- 小林 忠夫 (1999) 『カタカナ語の正体』 東京：丸善株式会社。
- 松井 智子 (2001) 「関連性理論から見たポライトネス——意図伝達性の問題
について」 『言語』 30, 52-59.
- 松崎 由貴 (2004) 「メトノミー分析：関連性理論と認知言語学の比較を通して」
『学習院大学英文学会誌 2003』 77-88.
- Merriam Webster (2012) *Merriam Webster*,
< <http://www.merriam-webster.com> > (閲覧日 2012 年 8 月 23 日)
- 宮田 公治 (2007) 「外来語「メリット」とその類義語の意味比較」 『国立国語
研究所報告 126』
< <http://www.ninjal.ac.jp/gairaigo/Report126/houkoku3-6.pdf> >
(閲覧日 2012 年 8 月 15 日)。
- 新村 出 (編) (2008) 『広辞苑 第六版』 東京：岩波書店。
- 尾形 良道 (1969) 「言語の有契性について」 *Artes liberales* 5, 35-39.
- 大石 五夫 (2001) 『カタカナ英語と変則英語』 東京：鷹書房弓プレス。
- Sperber, D. & D. Wilson. (1986/1995) *Relevance: Communication and Cognition*.
Second ed. Oxford: Blackwell.
- 田中 牧郎 (2007) 「漢語・和語と比較した外来語に対する意識」 『国立国語研
究所報告 126』
< <http://www.ninjal.ac.jp/gairaigo/Report126/houkoku2-3.pdf> >
(閲覧日 2012 年 8 月 15 日)。
- 田中 建彦 (2002) 『外来語とは何か』 東京：鳥影社。
- ウルマン、S. (1969) 池上嘉彦 (訳) 『言語と意味』 東京：大修館書店。
- Wilson, D. (1999) “Metarepresentation in linguistic communication,” *UCL
Working Papers in Linguistics* 11, 127-161. Also in D. Sperber (ed.)

411-448.

Wilson, D. (2006) *Issues in Pragmatics*. (PLIN M301) 2006-7.

Wilson, D. & R. Carston (2007) "A unitary approach to lexical pragmatics: Relevance, inference and ad hoc concepts," In Noel Burton-Roberts (ed.) *Pragmatics*. 230-259. New York: Palgrave Macmillan.

Wilson, D. and R. Carston (2008) "Metaphor, relevance and the 'emergent property' problem." *The Baltic International Yearbook of Cognition, Logic and Communication* 3: 1-40.

Wilson, D. & D. Sperber. (2002) "Relevance Theory." *UCL Working Papers in Linguistics* 14, 249-287.